

僕はいつも二十五歳

「おう、久しぶりだなあ」

電話の向こうで、人なつっこい清水幹夫さんの元氣な声が弾んでいた。職業としての教師についていま、どう考えたらいいのだろうか。そう思ったとき、彼の柔和な顔が浮かんだ。大阪府高槻市の中学校に勤務する清水さんとは、もう六、七年会っていない。

「最近の現場の様子を聞かせてもらえませんか」

「ああ、いいよ」

雨が降りしきる晩秋の夕方、阪急高槻市駅前で待っていると、八人乗りの大きなワゴン車に乗って迎えに来てくれた。毎朝、学校までの通勤に使っているマイカーで、生徒たちを連れてキャンプに行くのに便利だ、とにこやかに言っていた。

「僕は、自分からはしゃべるのは嫌いだから聞いてくれたら、なんでも話すけど……」。清水さんはそう言いながらも、久しぶりに会う懐かしさもあつてか、しゃべりだしたらとまらない。

清水さんは、これまでどうして教師としての首がつながってきたのか不思議なほど、ラジカルな活動を展開してきた。「とことん子ども

もにかかわれば、そうならざるをえないよな」。そんな自信が体内からいつも発散していた。

もう十数年前になるが、僕が新聞記者として、教育問題を深く取材をしようと思い始めたころに出会った清水さんの印象は強烈だった。ちやうど全国的に校内暴力が噴出しはじめたときだった。「悪い生徒はどおもしろいよ」。高槻六中の技術家庭室で生徒たちの姿を熱っぽく語っていた清水さんを鮮明に覚えている。

「あんまり、変わってませんね」

「ああ、元氣だよ。僕は、年齢を聞かれたら、いつも二十五歳、と生徒に言っているんだ」

「二十五歳？ どういうこと」

「つまり、ね。大学を二十二歳で卒業したとすると、中学は三年で一つのサイクルを終える。一年、二年、三年で子どもの様子はガラリと変わる。一年と三年では世界が違ふし、三年やって『子どもがだいたいわかった、じややろうか』という気になるのが二十五歳なんだ」

「……」

「その精神、気持ち失って二十六歳になったと思つたら、退職のとき。それからは打算の道でもあるし、マンネリの道でもある。永

共に生きる (上)

毎日新聞記者

池田 知隆

リレー・ルポ

職業としての教師

④

「明治 92年2月号～4月号
(第一法規)」

遠の二十五歳で生されるのか、そうできなくなつたときには教師としての仕事は成立しない。それが原点でしょう」

五十歳を超えたいまも、「僕は二十五歳だ」と堂々と真顔で言いきつてしまふ彼の話には僕は感動した。どんな仕事にも、熱気というものを失つてはいけないな、と改めて教えられ

る思いがした。
「子どもに『おいミキオ』と呼び捨てにされたり『ミキちゃん』と言われ、『ハーイ』ですよ。僕が変わっているのかもしれないけれど、僕自身はこれでいいと思つてゐる」

生徒に媚びを売つてゐるわけではない。それよりもなによりも、生徒自身がまず教師の行動やしぐさを敏感に見ている。ベタベタとくっついたりしていけば、逆に生徒は嫌う。教師と生徒の間には、年齢に関係なく、愛称で呼ばれる関係がやっぱりあるようだ。

視線を低く

高槻市は大阪市と京都市の中間にあり、淀川右岸に広がる人口約三十六万人のベッドタウン。清水さんが一九六八年に初めて赴任した高槻市立第六中学校では、在日韓国・朝鮮人の居住区や炭鉱離職者の多い地区を抱えて、底辺に目を注いだユニークな教育実践を重ね

ていた。

そのなかでも「六中の教育」が全国的な関心を集めたのは、七十二年三月の「オール3B」問題だった。生徒たちの指導要録（学籍簿）に、各教科の学習記録をオール「3」（五段階評価）、行動および性格の記録をオール「B」（ABCの3段階評価）と記入したのだ。「差別をなくす教育」「一人の生徒も切り捨てない教育」を目指してきた教師たちの一つの到達点だったが、「受験体制に抗して生徒たちを差別、選別しない試み」という同情から「教師としての責任を放棄している」という反発まで様々な波紋を広げた。

「評価」の問題は、まさに教育制度の根幹にかかわる事件で、一時、清水さんたちは裁判闘争までも覚悟していた。どうしてそこまで踏み込んだのか。深夜遅くまで語りあい、その問いかけの深さに僕は圧倒されたこともあった。

ちようどそのころ六中の生徒たちの「荒れ」が急激に目立ち始めた。「荒れ」た生徒の集団が万引、暴行などを行つて、五十人もの生徒が警察に補導された。「家がおもろない」「授業がおもろない」「クラスがおもろない」と叫ぶ生徒たちは「教師はきれいなことを言つてるだけや。実際やつてゐる授業は、わからへん奴

を放つたらかしてゐるだけやないか」と教師たちに向かつてきた。

「教師は『差別をしない』と言いながら、授業は評価の中でやつてゐるやないか、と問われたのです」と清水さんは言つた。「荒れた生徒たちは、日々の授業を行つてゐる教師の実践の質を追及したのです。それまで『労働条件・定員の問題が解決しなければ……』と置き去りにしてゐた教師の姿勢を浮き彫りにした」「一人も切り捨てない」授業をさぐる中で「評価」の問題が浮かびあがつた。

それだけではない。在日韓国・朝鮮人教育にも授業の中で長時間取り組んだ。障害者を地域の中学校で受け入れよう、と言ひ出したのも六中だった。困つた子がいたときに、それを見過ごすのか、それともその子と共に厳しい人生を歩むのか、という問いかけを中学生たちに次々と投げかけた。

しかし、その後、父母の反発も生まれ、「教育正常化」を叫ぶ父母によるデモ騒ぎまで発展した。

清水さんは六中を去つた。高槻市同和教育研究協議会事務局を経て、別の中学校に赴任。そこでは障害者が中学校卒業後、花づくりの仕事しながら街でくらせるように、という「花の会」の活動が続けた。三年前に現在の

中学校に転任した。

「いろいろやってきたけど、僕がいないとダメだと思ったことはないね。六中だって同じこと。出ていっても、まだだれかがやって動いていく。原点がわかんなくなったら、子どもに戻れ、ですよ。教育の原点は教師ではないことははっきりしている」

筑豊を歩いて

「子どもの現実を知るためには、教師はできるだけ社会の生の姿を知らないといけない」清水さんは夏休みになると、社会科教師といっしょに日本各地を回った。伊方の原発建設予定地、八郎潟の干拓地、日産自動車の生産ラインの三交代制の実情……と実際に足を運んで、住民や労働者たちの声を聞いた。そんな清水さんにとって、最も深い印象を受けたのは筑豊の炭住街に住んでいた記録作家、故上野英信さんだった。上野さんは「追われゆく抗夫たち」「地の底の笑い話」などすぐれた記録文学を残している。そして六中の校区には、筑豊からの炭鉱離職者が多くいた。

「だれも上野さんみたいな人間になれるか、と言ったらない。もちろん教師は教師の鏡にはなれない。むしろなつてはダメなんです。ステレオタイプをつくるだけですから」

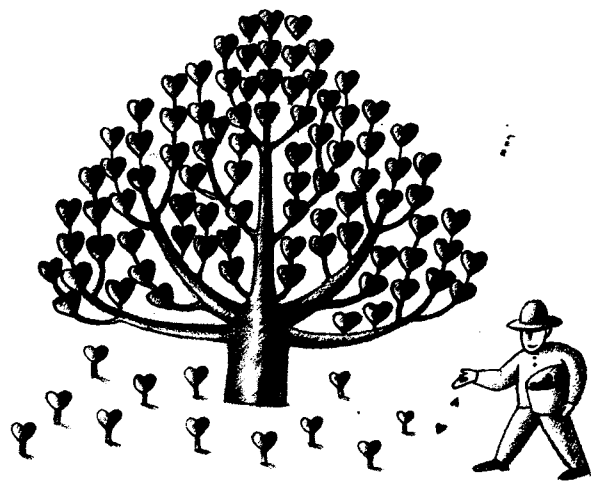
筑豊にある国鉄の駅で初めて会った上野さんは、丁寧につきあてがしてあるズボンをはき、気さくな人だった。台風が襲来した夜の公民館。そこで四時間も続けて話してくれた上野さんの話は「座右の銘ではないけど、忘れられない」という。

それはアフリカのある部族の話だ。アフリカの奥地に住むその部族には、塩がなくていつも困っていた。塩を得るには、周りの敵対する部族の間を抜けて海岸まで走っていかなければならぬ。そこで塩を取りに出發するときは、あらかじめ何人かが殺されることを見越したうえで多くの人間が出ていく。敵対する部族との戦いを経て、海にたどりついた何人かが海水を思う存分飲む。体内に濃縮して身体から塩分が噴き出すくらい飲んで、集落に戻る。仲間が倒れてもそうやって塩をもつてかえる。

清水さんは言う。

「塩を運ぶというその無償の行為みたいなものがなければ、部族は生存できない。それに命をかけて運ぶ人間は、その行為によって何を得られるものでもない。しかし、苦しい道程、その全部を含めてその部族の生存にかかっている。

どうしてそんな話をするのかな、とそのと



き思っていたけど、後でじっくり考えたら、僕たちの行き過ぎをとがめているのだなあ、と思いました。猪突猛進で、とにかく周りに迷惑をかけてもやればいい、という傲慢さを見抜いて、警告とか忠告をしてくれたんだなあ、やっぱり見えている人はいるな、と。私たちのまわりにそんなことを言ってくれる人はいなかったから」

上野さんにとっての抗夫は、もちろん清水さんにとっての生徒だった。

「子どもとの関係を見ると、こちらが勝手に一つのラインを引いて、そこから見るのは傲慢なやり方だ。相手は人間だし、こっちは人間。結ぶ線は常に変わっている。その線も直線で結ばれているのか、曲線で結ばれているのか。あるいは結ばれているのと錯覚しているのかもしれない。結ばれていないことのほうが多いし、特に教師の世界ではそうだ」

そのあたりのことは「皮膚感覚」でわかる、と清水さんは言う。それは自分の身をさらして感じとっていかねければ獲得できないし、そうしないと子どもの世界も自分の中に入っていない。その意味でも、「僕は二十五歳」という感覚は大事なことのようだ。

清水さんは個人的な信条として「三年主義」を貫いてきた。組織で活動しても三年でやめるということだ。教組運動、同和教育研究協議会、地元高校への集中受験運動、中学校の卒業生たちの進路の行方を見守っていく追跡指導運動、障害者の進路保障……などもそうやってきた。

「俺の作った組織だぞ、と言って居座る人が多いけど、僕は正直言って興味がなくなってしまうんです」そう言って現場に戻り、必ずクラス担任を続けた。周囲から「勝手だ」「組織を作っておいて無責任」という声もでたが、気にとめなかった。

いつしか周りにいた人間たちは、ほとんど管理職になった。同じ世代でヒラの教師でいるのはほとんどいなくなった。しかし、それぞれの生き方があるのだからそんなことはどうでもいいし、原点を忘れちゃダメだ、という思いが強い。まるで「化石になった」ような気がするときもあるようだ。

マニユアル化した問い

「一人も切り捨てない教育」という理想を掲げて燃え上がったところから二十年という歳月がいつしか流れた。いま、現場にみると、「えっ！ 六中教育はこんなになつたの」と清水さんが驚くこともしばしばある。

「元祖は僕らであることをだれも知らない。『僕の言ったことが、こんなことになってるの。そんなことではないんだ』と言って、若い教師に『これが正しい』と言われ、ケンカになってしまふ。そんなに子どもに押しつけるような硬直化したものではなかったはずだし、第一、子どもはそんなふうに生きてい

ませんよ」

その一つの例として、「勉強会」か「補充授業」か、の問題がある。

清水さんが六中にいたころ、在日韓国・朝鮮人の生徒たちが授業からはみ出ていた。「おまえら何してんだ。ブラブラしているのだったら、勉強を教えてやるから、教科書をもってこいよ」と言うと、わっと集まってきた。技術家庭室を占領して、「先生、これを教えて……」「これも……」という具合になった。

教師一人では手に負えなくなり、同僚に呼びかけて「ちょっと勉強会を開こうか」ということになった。しかし、そこに入ってこれない子、元氣のない子、落ちこぼれてシユンとしている子、クラスの中で沈んでいる子たちに「どうしていったらいいのかな」という悩みがあった。

そのとき生徒の誰かが代表して「おれは勉強会してくるぞ」と参加宣言をした。「そこでがんばってくるからな。ほな、がんばれよ」という軽い感じのものであった。そのことが同和教育研究集会で発表され、それはいいことだ、と全市的にやっつていこうと広まった。

「勉強会」「参加宣言」は、いつしか「補充授業」「補充宣言」と名称がついていた。

「僕は勉強が遅れています。だから補充授業

でがんばってきます」という具合に補充宣言はパターン化されたが、「そんなの、いやだなあ。気持ちが悪い」と清水さんは言う。

「六中ではクラスごとの勉強会方式にしていた。放課後、できる子もできない子もいっしょに勉強する。しかし、最初から補充授業があつて、補充宣言させることで、クラスの中からその子たちを切り離していることに気がつかない。放課後のクラブ活動にしても、その子がいないと助かる、ということがある。しかし、教室にいっしょに残って勉強して、それからクラブをやるようにしていかないと、子どもの間の人間関係が切れてしまう」

いつしか「勉強会」と「補充授業」が対立する概念になってしまった。妙な形で「こうしなければならぬ」とパターン化されてしまったのだ。「こうしなければならぬ」

「……ねばならない」「……すべきだ」という観念先行で考える教師のやりかたを清水さんは「ネバネバ、ベキベキ路線」と名付ける。それに対して清水さんは「子どもはいっしょに勉強するようにするし、そこで勉強する」という子どもの自発的な行動の流れをみつめる「なるする」路線を提唱する。

いまもお一番の問題になっているのは、現行の学習指導要領体制の中で、落ちこぼれ

ていく子をどうするか、だ。これをどう克服するのか。その子たちを「駆逐する」のではなく、「連帯感」をどのように生み出していくかである。

「受験の壁に対してどういうふうに立ち向かっていったらいいのか。一人で個別に立ち向かうのではなく、連帯することで非力な自分というものを学力を含めて何倍にも大きくすることが出来る。いまの子にとって、補充授業は『いつてらっしゃい、さようなら。おれは帰って勉強する』となつてしまっている。そうではなく、クラブ活動も三年になって引退しているのだから、いっしょに勉強して乗り越えていこうという、やさしさみたいなものを育まないといけないのではないかな。ついつい、人間がわかつてないんじゃないか、と思つてしまうなあ」

自称二十五歳定年説、子どもとの間の皮膚感覚。清水さんを見ると、教師という職業はなかなかティーチングマシン(教育機械)にはおさまきれないものだ、と思う。しかし、その情熱や感覚を失ったときに、学校は殺伐とした「収容所」になる。

「いけだ・ともたか」

夏ミカンの学校

「うちの学校を夏ミカンの畑にしてしまいたいよ」

大阪府高槻市にある中学校の教師、清水幹夫さんは、茶目つけたっぷりの顔で言っていた。

「甘夏は丈夫だし、何百という実になる。グランドの周囲に黄金色のミカン。いいでしょう」

目を輝かせ、いかにも愉快そうだった。いつしか僕の目の前に、夏ミカンがたわわになっているのどかな学校の光景が浮かんできた。

「うーん、いいですね」

夏ミカンのある学校。僕は、その新鮮なイメージにすっかり感心した。清水さんは得意顔になって言う。

「H・Rの時間に収穫し、ジュースーにかけて食べてもいいし、ママレードをつくってもいい。甘夏のママレードはすこし苦いけどね」

きっかけは、二年前、市の学校整備事業で、学校に木を植えることになったことから。市教育委員会では、ケヤキのようなこの学校にもあるごく普通の樹木を植えることを思い描いているようだった。

「そのとき、僕が、校内緑化委員に立候補します、と言って、委員になったんです」

風土に合った樹木にはなにがあるだろうか。まわりの同僚たちに、そう問いかねながら、やっぱり夏ミカンだ、と清水さんは叫んだ。

夏ミカンは、あまり手入れもいらない。肥料をやっていれば、自然に実になる。

「三年生に知恵遅れの障害者がいる。卒業したあと、その子たちが学校に遊びにくることを考えたときに、夏ミカンを採りにおいで、と言えるじゃないですか」

生徒会活動の一環として、卒業した障害者たちを学校に招いても、その時だけの一回限りの行事になりがちだ。

卒業後、ふと学校の近くを通りがかり、家庭をぼつと見たら、夏ミカンがなっている。なんなら、その子たちが、それを摘んで地域で売ってもいい。もちろん学校のミカンだから、元値はタダ。調理室を使ってジャムをつくってもいい。清水さんの発想は次々に膨らんだ。

「緑化委員になるときは、障害者のことをこれっぽっちも言わなかった。将来、そんなところで結びついたらいいな、と心ひそかに願望だけはもっていたけど……。子どもたちにと

共に生きる(中)

毎日新聞記者

池田 知隆

リレー・ルポ



職業としての教師

4

学遊. 923730

って本当に何がプラスになるか、考えただけです。」

清水さんの体中から「してやったり」という喜びが漂っていた。

時の流れとともに、子どもたちは成長し、学校から次々と巣立っていく。さまざまな障害を持った子、困難な生活環境に追いやられている子も、卒業してしまえばそれっきり、の関係で終わるのか。教師は、子どもたちにいつまで、どのようにかわるのか。

追跡指導のゆくえ

前回に紹介したように、清水さんは、かつて高槻市立第六中学校で「一人も切り捨てない授業」を掲げて、生徒たちに多くの問いを投げかけた。在日韓国・朝鮮人教育、同和教育、障害児教育……などを通して、弱者との痛みを共有すること、困った子がいたときに、その子とともに人生を考えること、自分とはなにか、生きるとはどういうことか、と。

しかし、問いかけることは、自らが問われることでもある。教師も自らその問いに答えようとしなければならない。

障害を持った子が卒業後、どんな状態に置かれているのか。学力の遅れを必死に取り戻

しながら、高校に進学したものの、中退していく子も数え切れない。その姿を中学校の教師としてどう考えるのか。

「少なくとも、教師としてその子たちの卒業後の進路を見つけていくべきではないか」

清水さんは、六中を去ったあと、市同和教育協議会事務局に入り、教師たちにそう呼びかけた。つまり「追跡指導」をしよう、というわけだ。そして十数年前、市追跡指導協議会ができ、市全体で中学校卒業生のその後の進路をたどる調査や訪問を続けることになった。夏の暑いさなか、卒業生たちの暮らしぶりを訪ねて回る高槻の中学校教師たち。その姿に僕は「よく、やるわ」とたが感嘆するばかりだった。

さまざまな教育運動を重ね、子どもたちとかわってきいた清水さんにとって、いま残念に思うのは推薦入試の問題だ。

十数年前、高槻教組（当時）の運動方針に「高校入試における推薦制の導入」を盛り込んだが、それは最底辺の子どもたちの進路を保障しようというものだった。いま、全国的に高校で広がっている推薦入試とは、考え方がまったく逆だ。

高校入試の選抜権は、高校側だけでなく、

中学側も教育したのだから当然、持っていていい、という考えがその背景にある。いま、高校側が、中学卒業生のいいとこどりをしているのが実情だ。しかし、公立高校であれば、そうでないところも十分に配慮してもいいはず。アメリカでは、黒人差別や少数民族などの問題を通してマイノリティー（少数派）を特別枠で受け入れている。その発想が日本でどうしてできないのか。

子どもに目を向けると、そのような入試制度に改革すべきだと見えてくる。アメリカでできて、どうして日本ではできないのか。子どもの権利としてそれは認められるはずだ。

各都道府県教育委員会は、中学卒業生が減れば、それに応じて高校の門を狭くして、進学率のガイドラインをそろえようとしている。だが、入試を控えた生徒の側から言えば、それは納得できない問題だ。高校に進学したい、という人間に対してあえて教育行政が「落ちこぼれ」とレッテルを張るようなものに見えてくる。最底辺で努力している子にとっての「推薦制」は、教師たちの視野からも消えてしまったようだ。

「花の会」を結成して：

清水さんにとっては、障害を持った子どもたちのことが一番の気がかりだった。障害を持った子たちといっしょに生活していくとはどういうことか。口でいうのは簡単だけど、具体的に施設がなければ、その子たちは在宅の生活になる。

それ以外の道って、何があるのか。障害者たちが「花づくり」をしながら、街で暮らせるようにできないだろうか。そう思って「花の会」の結成に教師としてかわった。いまは内職と畑と石鹸づくりを中心に、障害者約二十人、指導員三、四人の独立した経営体として続いている。親たちが会費を出しあい、補助金をもらいながらの零細な運営だ。

発足から十年経ったいま、清水さんは「花の会」の活動から離れた。

「教師みたいなのは、いつまでもいないほうがいいのです。教師の発想は貧しいし、組織の中で生きる人間と組織を殺す人間がいるとすれば、教師には殺す人間の方がはるかに多い。僕も、言うだけ言って、人を引きずり込んでおいて活動から離れるのは勝手だ、と言われたりするけど、あいつがいないとダメだ、

といってズルズルと居座ってしまったら、組織は活性化しませんよ」

そこで、自分の生きる場所をどこに探すのか、といったクラスしかない。なにしろ「教師」という職業を選んだのだから。清水さんは教育運動と深くかわりながらも、必ずクラス担任に戻ることを心に決めていた。

自分を律する

いま、清水さんはだれよりも早く学校に行っている。午前七時半、自分の机をきれいに磨き、教室の空気を入れ換える。黒板もきれいにふいて、ピシッとした気分で生徒の到着を待っている。

始業時間は八時二〇分。職員室のふき掃除をして同僚を待つこともある。

「あー、きれいだな」

「清水先生にやってもらったんですね」

「ごくろうさんです」

教師から感謝されても、それっきり。あとは見向きもされない。ところが、生徒たちの反応は違う。

教室で「勉強会」をしたあと、生徒たちが「先生、黒板をふいとくわ」と言って自発的にきれいにふき始める。朝、教室に入ると、

黒板に

「先生、ご苦労さま」

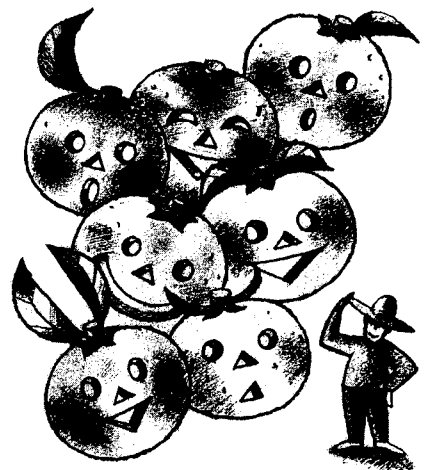
「朝、寒いでしよう」

と生徒たちが書いてあるときもあった。そんな形で生徒とのつながりは大事にしたい、と清水さんは言う。

「自分の身の回りは、常にきれいにしておく。絶対に干渉されない。そのようなエリアを自分のまわりにつくっておきたいし、自主管理の発想は本能的にもっている。でも、それはあたりまえの生活感覚でしょう」

職員室をきれいにするのはなく、きれいにさせられる不気味さ。自主的でなく、「片付けさせられる」という過程の中で、管理の徹底が図られる。

「こちらの居住いをただすというか、緊張を



高くすることを自分に要求することで教育の
自主性、自由を守りたいのです」

つまり、被使用人という感覚でなく、おれ
が職場の主人公だ、という労働者中心の「オ
レだぞー」という感覚。いちいちケチをつけ
られてたまるか、という自負心が清水さんに
息づいている。

ドラマのある教室

教室での生徒たちとの日々のふれあい。ド
ラマにならないことのほうが多いように思え
るが、実際はドラマが次々と生まれている。
ただ、それを無視するか、目をつぶって見な
いことにするか、強制的に押しつぶすか、で
生まれないことにしていることも多々ある。
生徒とかかわり続けることは大変だ。だが

らといって、ドラマを避け続けている間に、
子どもたちがドラマを語らなくなる。

「あの先生に言ってもダメだあ」

とあきらめて、教師をきつちりと勤務評定
する。そしてドラマを持ち込まなければ、そ
の中の登場人物になりえない。子ども一人一
人の顔にドラマが書いてあるが、子どもたち
の心は無化され、モノとして画一化され、規
格化されていく。

「あいつの顔は、どんなときめきとドラマを
示しているのか。教師は、そんなドラマを日々
吸って生きているドラキュラみたいなもので
す」

清水さんには、それが若い教師には見えて
いない、と思えて仕方がない。

「生徒の表情を見て、『も』と話を聞いてやっ

たほうがいいのじゃないの」と若い教師たち
に言っても、「あいつら、またぐだぐだ言って
いるだけですよ」と素気ない返事がくるだけ。
それは、全然違うのじゃないかな、と思うん
だけだね」

教師たちが集団主義教育という言葉で平然
と使うのも、気にかかる。生徒会も管理の道
具としての集団にすり替えられ、「非行を克服
する集団を育てました」ととくとくと語る教
師たちにも寒々する、と言う。

「教師は、びつくりするようなアナクロニズ
ムで、遅れている話どころではない。集団主
義で打ちのめされていたソ連社会、東欧がい
ま変わろうとしているけど、その苦痛を共有
していない。ソ連社会が死滅した現在におい
て、集団主義教育という言葉も死滅したんだ

という発想をもたなければ、これからの教育は絶対にやっていけないよ」

人間が人間として痛みを共有できる人間関係。いっしょに苦難を乗り越えていくような人間のヒューマニズムに基づくつながり。生徒たちをただ教育の対象とみるのではなく、「語りあう」関係を築けるか。そんなごくあたりまえの生活感覚こそが大事なかもしれない。

「語る」ということ

清水さんと会う直前まで、京都で取材していた国際研究集会でも「語り」が話題になっていたことを思い出した。「現代における人間と文学」をテーマに国際日本文化研究センターが主催したそのシンポジウムで、河合隼雄・同センター教授（心理学）が「現代人の『語り』を見いだすところに、現代の文学の使命があるのではないか」と指摘していた。そして登校拒否の子を持つ父親からのこんな相談事例を紹介した。

「科学の発達で月にまで人間が行く時代ですけど、子どもを学校に行かせるボタンはないのでしょうか」

その問いかけには、さすがの河合教授もび

っくりしたそうだ。

「それは簡単です」

「えっ、どうしたらいいのですか」

「その子が寝ているうちにぐるぐる巻きにして学校に運ばばいい」

「……」

「でもね。ボタンで動かすことができるのはモノなんです」

そんな会話を交わした河合教授はしみじみと言う。

「自然科学、近代科学は『私』を除外することとで成立し、普遍性をもって世界に広がった。その相談では、父としてどうするのか、を抜きに考えられない。つまり『私』をその登校拒否現象の中に入れ、人間としての『語り』を見直さないとけない」。

現代人がいま、世界の中で生きるものとして自己を切り離さず、自己と世界のかかわりの体験を他に伝えるためには「語り」しかない。その「語り」こそ文学の得意とすること、語る人も聞く人も近代自然科学的な思考の洗礼を浴びているとはいえ、そこに現代の文学の使命がある、と言っていた。

いま、人間が人間を支配しようという考え方が強まり、人間の関係性が失われつつある

ように見えるが、その「語り」の大切さは、そのまま教育の場にもあてはまる。いや、それこそ、いま最も求められていることではないのだろうか。

子どもたちをただ教育の対象として見るのではなく、人間的な存在としてつきあう。あらためて言うまでのことはないようだけど、教師たちがいま、子どもたちとの間で「自分を語る」関係をいかにつくるのか、それが問われている。

「そんな『語りあう』関係を持ち続けるのは、しんどいことでもなんでもない。でも、僕が子どもたちを切るのではなく、向こうが教師の僕を切ってくる。切られているな、と思ったら、あきらめて教師としての自分の人生を考え直しますよ」

そんな清水さんに「いつまでも若いですね」と言ったら、「自分の仕事に誇りをもっている職人なんかもつともし若いでしょう。それと同じ感覚ですよ。僕自身の職業意識は果たしてどうなのか。初心を忘れていやしくないか。ギクリとさせられつつ放した。やはり「問う」ことは「問われる」ことのようなのだ。

「いけだ・とまたか」

「ばけもの屋敷」というけど…

「あそこは、ばけもの屋敷」みたいやて」

大阪府高槻市の市立第六中学校をめぐって、かつてこんな風評が立った。深夜まで教室の灯がこうこうとついている。教師も生徒も学校に残り、いつまでもうごめいていたからだ。しかし、「ばけもの」と言い切ってしまうと誤解されかねないが、そのあとに

「ほんまに、ようやるわ。あちこちでたたかれても、たたかれても、がんばってる」という感嘆の声が必ず続いていた。

教育は、手を抜こうと思いたって、その気になりさえすれば、いくらでも手が抜ける。しかしまた、やる気になってやりだしたら、これまたいくらやってもきりがない。六中では、「生徒を一人も切り捨てない教育」を目指して教師たちは燃えた。しかし、いつまでも燃え続けることはできない。

「その六中に私、十六年間もいたのだから」土曜日の午後、待ち合わせた喫茶店で久しぶりに会った佐々木敦恵さんは、しみじみと言った。学校の帰りに、リュックサックを背にバイクに乗って駆けつけてくれた。

「でも、まだまだ元気よ」

いま四十三歳。二十三歳で新任教師として

六中に赴任してから、三十九歳まで六中で過ごし、四年前、七中に転任した。独身。

「アンタは、六中と『寝た』んだなあ、と同僚に言われましたよ。おぞましいなあ、って自分ながら思うけど、結局、そうなのよね。学校が生活の場だったから」

苦笑まじりにあっけらかんと言つてのける。「六中を去る時の最後のクラスは、最高に良かったわよ。やるだけのことはやった、と思つたわ」

心に踏み込むこと

佐々木さんが六中に来たのは一九七二年。「指導要録オール3記入」と「英語自主教材」で揺れた年だった。島根県松江市の生まれ。島根大文学部をでたが、地元では教員の口が見つからず、英語科の教員として大阪で採用された。

まずは、変な学校だな、と思った。授業中に爆竹やネズミ花火がパンパンと鳴り、廊下では生徒が大声をあげ、窓から教室内をのぞいていた。

「これが、都会の学校か」

ちよつと注意すれば、髪の毛を引っ張りまわされた。見たこともない子が教室に座つていて「あんた、ダレなの」と聞けば、「ワシ

共に生きる (下)

毎日新聞記者

池田 知隆

リレー・ルポ



職業としての教師

④

を知らんのか」とすごんできた。その前の年に六中から分離した学校へ転出した生徒が、平然と元の学校に通っていたのだ。

在日朝鮮人のことなどもまったく知らなかった。親は騒ぐは、子どもも騒ぐは、で日々新鮮だった。わりと性にあっているな、とも思った。しかし、能力以上のことを要求された。「まだ授業もしていないうちから、英語の自主教材づくりで本屋通いをしたのですから」

そのころ、生徒が生き生きと授業に取り組めるように、と英語科の教師たちは工夫を凝らした自主教材づくりに取り組んでいた。学習評価も、それまでの優良可の三段階では、生徒がどこでつまづいているのかわからないと「点検表方式」に切り換わった。英語であれば、カリキュラムを「アルファベット」「動詞」「代名詞」「」と分けて、その項目ができれば、点検表に「○」をつけるようになった。教師にとって生徒全員の全項目に「○」をつけることが目標だった。教師には気が遠くなるほど努力が求められた。

そんな点検表方式を採用すると、指導要録の5段階評価も無意味になる。学校ぐるみで「オール3」記入することが決まった。しかし、その急進的なやり方は父母の反発を招い

た。

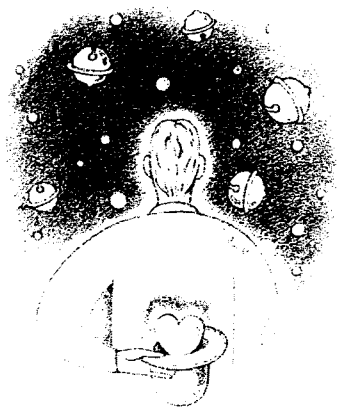
佐々木さんは特に生徒会活動に深くかわったが、そこに六中教育の際立った特色があった。ホームルームもおざなりにはすまない。生徒たちがクラスの中でそれぞれの考え、生き方を語り合って、一学期に一回の学年集会につなげていった。焦点にあてられるのは、障害をもった子や学力面や生活面でつまづいている子たちで、その子の訴えを聞きながら、自分たちの生き方を考えるようにしていた。

人のことを非難するのは、人の心に踏み込むこと。いわば人の心を傷つけることに他ならない。適当に言って、あたらずさわらずにしていたら、踏み込むことができないが、六中の生徒たちはそれをした。

「教師の間も踏み込んだり、踏み込まれたり。しんどいけど、それはおもしろかった。子どもたちはストレートに言って、突っ走ってきた」

四年後の七六年春の卒業式は壮烈だった。

「今から、教師、父母、六中生を含む日本人みんな、それに対して、オレという在日朝鮮人が言うから、よう聞いてくれ」——一人の卒業生の差別をめぐる発言を皮切りに、学力の低い生徒、障害をもつ生徒、就職していかざ



るをえない生徒が次々と壇上から、みんなの前で苦しい心をさらけだし、訴えていった。卒業式は、別れを惜しむ儀式どころか、義務教育を終えて、これからどう生きるか考える場になっていた。

そんな生徒会の活動で、地域を回っている佐々木さんに実家からの連絡が届かず、母の死に目に会えなかった。葬儀後もすぐ、生徒のことが気になって学校に戻ったりした。しかし、父母のテスト復活を求めるデモなどで学校内外で騒然とし、心を通わせてきた教師たちも次々と六中から去った。精神的に苦しい時期も続いた。

深夜の勉強会も

しかし、六中で、最後に担任した三年四組

は、佐々木さんにとって「六中教育」を彩る花火のように鮮烈なクラスだった。

その学年は八十五年春に入学してきたときから、突然変異みたいにエネルギーにあふれていた。入学後まもなく、二十人もの生徒がタバコを吸っていた。生徒会では「なんたることだ」と議論がわきあがり、タバコを吸う生徒は、他の生徒から情け容赦なく批判された。すると、「そこまで言わなくても……」という同情論もでてきた。ケンケンガクガク。学年集会ではみんなにぎやかに議論した。ホームルームも、泣いたり、わめいたりの大騒動。班ノートに二十頁も書いている子もいた。「学年によっておもしろさの波みたいなのがある。生徒の質というか、リーダーやワルを含めて、どんな関係をもてるかで左右される。いくらやってもダメで、不毛の荒野を耕すと思うときもありますから」

そして三年四組では、夜、学校で勉強会を開いた。生徒が自主運営して学びあうところだ。最初はごく数人で始まった。会場も音楽室。塾に通っている子も多く、毎日、勉強会に来れる子は限られていた。しかし、だんだん盛り上がり、塾をやめて勉強会に参加する子が増えて、会場も教室に変わっていった。クラス四十三人中、多いときは三十七、八人

も顔をみせた。「障害」をもっているT君も来ていた。

深夜零時まで続く日もあった。

「みんな、自宅で食事してから再び学校に集まってくるんです。門限は一応午後十時になっているのですが、盛り上がり……」

佐々木さんはただその時間に学校にいるだけで、ほとんど関与しなかった。プリントの準備をするぐらいだった。

週一回は、勉強会を早く終え、教室でカラオケ大会を開いたりしていた。「息抜きにやっているんや」と生徒たちは言い、ほとんど笑いつ放しだった。そして人数も多いだけに感情的な行き違いもたびたびあった。そのときは勉強会が話し合いの場が変わった。泣いたり、わめいたりして、生徒たちの鼻息も荒く、佐々木さんが「入り込めないな」と感じるときもあった。

夏休みの間も勉強会は続いた。毎日、生徒たちは、午前九時からの「午前の部」のあと、プールで泳いで「午後の部」、「夕方の部」に参加した。お盆のころの十日間はど休んだだけで、佐々木さんも、ほとんど登校した。

リーダーのI君は、「いろいろな立場の友人たちが見えてくるのが三年生。『進路』を考えなとき、T君のように、『進路』を閉ざされて

いる友だちもいた。ともに支えあう仲間作り」を訴えて生徒会長に立候補すると、クラスの仲間たちの熱い支援で当選した。I君は府営住宅に住むごく普通の子。「彼の執行部仲間の五人は、一人ずつ見るとどうってことないけど、生徒会活動ではその一人一人がとても輝いていた。相手がいて自分が変わった、とそれぞれが思い、青春ドラマに出てくるような世界でした」と、佐々木さんも生徒たちに「ぞっこんだった。『おまえらクサイなあ、』と言えば、先生もクサイで、と言われる始末でしたよ」

勉強会は、冬休みの間や卒業式後の公立高校の入試日直前まで続いた。

「私は全然苦痛じゃなかったけど、私につきあってくれた人は大変だったろうな、と思いますよ。ほとんどの教師が体をこわしたものの、病院に行かずにすんだのは、私だけですから」

自分たちが好き

しかし、その生徒たちが卒業するのと同時に、六中からの転出が決まった。

「その子たちと卒業後も支えあっていこうと言っていたから、みんなのひんしゆくをかわしましたよ。なんて六中におれへんのや、って」六中を去った後も佐々木さんは、毎週土曜

日午後、六中に通った。卒業後も地域の中で、「障害」をもつT君を支えていこうという同級生グループは二、三十人単位で集まっていた。佐々木さんの自宅のカギもその子たちに渡し、いつ帰っても、その子たちが勝手に勉強したりしていた。しかし、高校に進学すれば、そこは中学とはまったく違った世界。それぞれが新たな自立を迫られ、改めて自分を確かめる場として、佐々木さんの家があったようだ。その子たちが高校を卒業するまでの三年間は、とことんつきあった。

「仲間と本当にいっしょにいたい。そうすると、新しい自分が見え、引き出される。中学三年生のときの自分たちが大好きだった、と子どもたちは言っていたけど、自分たちが大好き、っていい言葉でしょう。それが出ると本物ですよ」

受験戦争の嵐の中で揺れ続けた「六中教育」のネジを巻き返し、少し原点に戻したという自負も少し感じることができた、と佐々木さんは言う。

教師の「生活」感覚とは

その「ばけもの屋敷」に十八年いたというもう一人の元教師を訪ねた。川野守義さん。六十一歳。六十四年春から八十三年春まで六

中に勤務した。その後、別の二つの中学校を経て昨年春に定年退職した。いまは主夫暮らしで「事務員」として働いている妻においしいものを食べさせたい、と毎日思っていますよ」とにこやかに言う。

「六中教育はつぶされていったが、子どもたちと共に生きていこう、というそのどこがいけなかったのか、いまも納得できませんね」父を早く失い、小学校一年のとき親戚を頼って満州（中国東北部）に行った。終戦は、中学三年のとき、奉天（現・瀋陽）で迎えた。引き揚げ後、定時制高校に通って阪大理学部に入り、文学部哲学科を卒業して英語の教員になった。波乱に富んだ人生を送ってきた。「六中では、教師として自分はどうするのか、と常に問いかけられた。子どもと共に生きていこう、と地域から考えていくことを教えられましたよ」

これからは、中国からの帰国児たちの教育相談のボランティアをすることになっている。

「市からやってほしい、と連絡がいま来たところですよ。どこまでやれるかわからないが、楽しみてですね」そう目を輝かせて言う川野さんは、地域の中で新たな「共生」の場を探そうとしていた。

信州・乗鞍岳に、川野さんが二年がかりで

自力で建てたログハウスに、夏や冬休みに佐々木さんや（前回到登場してもらった）清水幹夫さんたちが集まってくる。受験体制に抗して「共に生きる」教育への夢を描いた六中の教師たち。「挫折」を重ね、職場を異にしてきたが、深い信頼で結ばれている。

地域に根ざした教育よりも、全国一律の教育に向けての統制が強まり、学校運営をめぐる管理の目も細やかになった。そんな中で教師は「ティーチング・マシン」（教育機械）としての技術への期待が大きくなっているかのようだ。しかし、そこに職業としての教師の情念みいたないものは、おさまりきれぬのだろうか。

「やるだけのことはやってきたし、いまは、『墓堀り人』みたいな心境ですよ。だけど、川野さんから、教師にとっての『生活』みいたないことをじっくり考えないといけない、と言われましたよ。これからの人生も長いし……」と清水さんは言う。人間と人間をつないでいく「生活者」の感覚。教師にとって「遊び」。学校五日制が目の前の課題となってきたいま、そんなことをじっくりと見つめ直す時が来ているのかもしれない。

小型船舶の免許を持ち、マリンスポーツが好きな清水さんは、時間を見つけては淀川の

河原に、社会研究部の生徒たちを連れて行き、バーベキューを食べたりして楽しんでいる。

「肉の塊を買ってきて、河原で料理したら、すごくまいし、生徒も喜んでいいる。その楽しさを知ってほしいなあ」そんな話を聞いていると、教師はもつと「遊び」を知り、生活者としての魅力を高めてもらいたいな、と思えてくる。

人をつなぐ力

「私は暑苦しい人間やと思うわ。これでもか、これでもか、とまとわりつくから」

佐々木さんは、自らの教師生活をふりかえりながら言う。

「いまの学校では、そんな暑苦しい関係は持てなくなった。教師の間で話しあっても、一

度反対されたら、もう食いついていこうとしない。それは、そのまま子どもとの関係にもあてはまりますよ」

教師と教師、教師と子どもたちの関係もクールになった。教師たちが力を合わせて何か新しいものを作っていくことは、難しい時代だ。親方（先輩教師）といっしょにやっていくか、というように体で覚えていく職人芸も、職場の教育力も薄れた。かつての「教育労働者」という言葉もそぐわない感じがする。そんな時、教師としてどう生きていくのか。

佐々木さんは言う。

「結局、自分に素直になることだと思いますね。ラクだし、気負うこともないし。素直に本当の意味で、つきあうことです。学校というところは、大人のつきあいをする必要はな

い。人間と人間が本当につきあうということとは、どういうことか、ちよつとでも見れるところではないのかな」

学校ほど多様な子どもたちが居合わせる場所はない。学校は、個性豊かな人間がいて、ドラマが繰り広げられる空間だ。

「最近、巫女さんみたい、と冗談まじりに言われたりするけど、シャリンシャリンと鈴を振って、私は何をしたらいいの」と佐々木さんは笑いながら言った。

「いまあえて教師の職業意識みたいなことを言えば、人間をつなぐものじゃないかしら。放つといたらつながらないものをつないでやる。難しいことですけどね」

「いけだ・ともたか」